

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座六の十八の二演舞場B二
電話(五四一)五四七 一 番

清元協会

港区西麻布一の二の三の四〇五
電話(四〇五)八〇〇 五 番

財団法人 古曲会

中央区銀座八ノ六ノ三 新橋会館
電話(五七二)〇二一 六 番

新内協

新宿区大久保二の二三の二
電話(二〇〇)四六五 三 番

常磐津協会

目黒区上目黒四の三十三の十四
電話(七一五)一五一 八 番

社団法人 長唄協会

中央区銀座二の十一の十九の四
電話(五四二)六五六 四 番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二の十五の十二の四〇三
電話(五八五)九九一 六 番

(五十音順)

後援 東京都

平成元年三月五日(日)

第一生命ホール

第一部 十二時半開演 四時終演

第二部 四時半開演 八時終演

'89 都民芸術フェスティバル

第十九回 邦楽演奏会

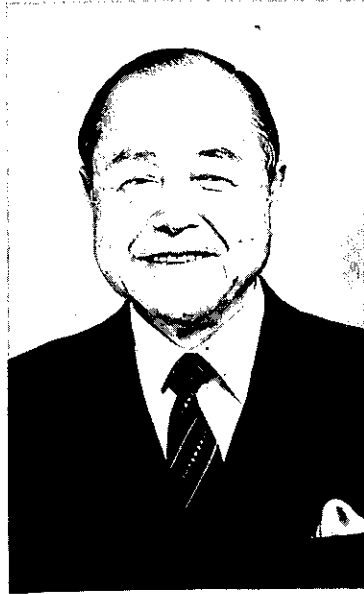
— 邦楽名曲選 —

'89都民芸術フェスティバル参加公演（昭和63年度東京都助成公演）一覧

分野	種目	演 目	期 日・会 場	入 場 料 金	問 合 せ 先	
音	オペラ	ベッリーニ「清 教 徒」 (原語上演) (藤原歌劇団)	2/1・2/3・2/5 東京文化会館大ホール	10,000~1,500円	財)日本オペラ振興会 (369)7020	
		ヴェルディ「運命の力」 (原語上演) (二期会オペラ振興会)	2/21・2/22・2/24 東京文化会館大ホール	10,000~1,500円	財)二期会オペラ振興会 (370)6441	
		原 嘉寿子「す て 姫」 (日本オペラ協会)	3/22・3/23 東京文化会館大ホール	7,000~1,500円	財)日本オペラ振興会 (369)7020	
楽	室内 オーケストラ	第 回 都民のための コンサート	オーケストラ 1/14~3/30 東京文化会館大ホール	2,500~1,000円	財)日本演奏連盟 (437)6837	
			室内 楽 2/9・3/14 東京文化会館大ホール	2,000円		
	ポピュラー	ラテン・ミュージック	3/10 よみうりホール	2,500円	財)日本音楽家協会 (585)3903	
演	邦 楽	第 19 回 邦 楽 演 奏 会	3/5 第一生命ホール	1,500円	邦楽連合会 (571)0216	
		新 劇	富本 研「夢 桃中軒牛右衛門の」 (合同公演)	3/9~3/20 俳優座劇場	4,000円	新劇団協議会 (341)8151 地人会 (354)8361
		新 劇	K・バクターソン「ガラスの家族」 (合同公演)	1/23~2/3 よみうりホール他	定時制高校生無料招待	新劇団協議会 (341)8151 劇団新人会0422(46)5461
劇	児 童 劇	「国 性 爺 合 戦」 (人形劇合同公演)	1/16~1/18 朝日生命ホール	前売 3,000円 当日売 2,500円 団体 2,200円	日本児童・青少年演劇団協議会 (409)1797	
		「小さなスプーンおばさん」 (舞台劇合同公演)	1/29~2/27 朝日生命ホール他	前売 2,300円 当日売 2,000円 団体 1,600円		
舞	バレエ	「ドン・キホーテ」	3/8~3/10 東京文化会館大ホール	7,000~2,000円 中高生無料招待あり	財)日本バレエ協会 (462)5524	
		「ラ・シルフィード」	3/2~3/4 東京文化会館大ホール	8,000~3,000円	東京バレエ協議会 (725)8000	
	現代舞踊	「ランドスケープ」 「生者の行進—巨神族との闘い—」 「体育館のペトルーシユカ」	1/10・1/11 東京文化会館大ホール	3,000~2,000円 無料招待あり	財)現代舞踊協会 (400)4544	
踊	日本舞踊	第32回 日本舞踊協会公演	2/15~2/17 国立劇場大劇場	5,000円 無料招待あり	財)日本舞踊協会 (533)6455	
		能 式 能	都 民 能 2/12 国立能楽堂	2,500円	財)能楽協会 (574)6441	
古 典 芸 能	民俗芸能	第20回 東京都民俗芸能大会	3/18 北区公会堂	無 料 招 待	東京都民俗芸能大会実行委員会事務局 0482(69)4174(宮尾)	
		第19回 都 民 寄 席	3/19 日野市民会館	無 料 招 待	都民寄席実行委員会事務局 0423(81)5534(大石)	

◎これらの個々の公演の詳細に関するお問合せは各団体へ、都民芸術フェスティバル全般にわたるお問合せは東京都教育庁社会教育部文化課(電話 212-5111 内線 44-531、44-532)へお願いいたします。

'89 都民芸術フェスティバルに寄せて



東京都知事 鈴木 俊一

都民芸術フェスティバルのシーズンがやってきました。このフェスティバルは、へぐれた芸術を、心ゆたかな、くらしの中へVをキャッチフレーズとして、東京都が芸術文化団体の公演を助成することによって、都民の皆様が優れた舞台芸術を鑑賞していただくという目的ではじめた催しで、今回で第二十一回を迎えました。

芸術性の高い公演内容、最高の舞台芸術を提供しようという出演者のなみなならぬ意欲とこの催しを心待ちにしている都民の皆様が熱い声援に支えられ、東京都の代表的文化行事としてすっかり定着してまいりました。誠に喜ばしい限りです。

私はいま、ふれあいというおいを大切に「マイタウン東京」づくりに全力を注いでおります。なかでも芸術文化は、私たちに豊かな心とゆとりある生活を与えてくれるものとして、大変重要なことと考えており、その振興に力を尽くしているところでもあります。都民芸術フェスティバルを他の文化的施策とともに、都民の要望と期待に十分応え得るものとして、また国際的にも誇れる催しとして今後とも一層充実、発展させてまいります。

この催しに、一人でも多くの皆様に参加され、優れた舞台芸術を心ゆくまで鑑賞していただきたいと存じます。おわりにこのフェスティバルに参加し、東京都の芸術文化の振興にお力添えくださっている邦楽連合会のみなさんすばらしいご活躍を心からご期待申し上げます。

第一部 番 組 (十二時半開演)

一、清元津山の月

同	同	同	同	浄瑠璃
清元	清元	清元	清元	清元
梅美春	梅喜久	梅美紀	梅多寿	梅光
上調子	同	同	三味線	清元
清元	清元	清元	清元	清元
香葉	梅絹	益代	梅喜代美	

二、一中節松羽衣

同	同	同	同	浄瑠璃
都	都	都	都	都
一けい	一みき	一いせ	一いそ	一いま
同	同	同	三味線	都
都	都	都	都	都
一いく	一さき	一ゆき	一いき	

三、義太夫天網島時雨炬燵 (紙治内の段)

浄瑠璃	竹本	越道
三味線	鶴澤	駒登久

四、箏曲冬の曲

箏本手

米川 敏子

米川 惠美子

米川 和子

辻本 親登代

清水 親寿美

富永 親み喜

瀬ノ上 親洵

米川 裕枝

米川 ますみ

芝崎 親輝

朝比奈 敏文

箏替手

五、新内若木仇名草(蘭蝶・四谷)

浄瑠璃

富士松 佐賀吉

三味線

富士松 菊三郎

上調子

富士松 菊三和

六、常磐津 仮名手本忠臣蔵・大序

浄瑠璃

常磐津 文字太夫

同

常磐津 小文字太夫

同

常磐津 八重太夫

同

常磐津 和光太夫

三味線

常磐津 菊助

同

常磐津 菊志郎

上調子

常磐津 啓寿郎

七、長唄 鞞 猿

唄

杵屋 喜三郎

同

杵屋 六美朗

同

杵屋 六昶

同

杵屋 吉之丞

三味線

杵屋 勘五郎

同

杵屋 六蔵

同

杵屋 裕光

上調子

杵屋 廣吉

囃子

笛 福原百之助

ワキ鼓

望月左武郎

立鼓

望月太喜雄

大鼓

望月吉

太鼓

藤舎呂雪

第二部 番 組 (四時半開演)

一、箏曲富士山
 草野心平 作詞
 二世上原真佐喜 作曲

箏	多	西	広	大	佐	嶋	林	山	上
			末	貫	藤	村	内	原	
	忠	佐	佐	貴	佐	真	真	佐	真
磨	和	喜	佐	佐	喜	佐	佐	惠	佐
	美	華	王	智	緒	乃	次	喜	

箏高音

箏低音

二、義太夫生写朝顔話 (宿屋の段)

深	駒	岩	德
雪	沢	代	右
竹	竹	竹	衛
本	本	本	門
駒	朝	駒	竹
之	重	龍	本
助		子	土
			佐
			子

三味線 鶴澤重輝
 箏 鶴澤悠美

三、長唄旅

同	同	同	同	唄
今	今	杵	芳	今
藤	藤	屋	村	藤
美	郁	佐	伊	文
知	子	臣	十	子
			衛	

三味線 今藤長十郎
 同 今藤苗悠
 同 今藤長由利
 同 今藤勢弥生
 離子 藤舍呂雪

藤舍華鳳
 藤舍清晃
 中井一夫
 中川善雄

四、河東節 常陸帶花の柵

浄瑠璃	山彦節子	三味線	山彦貞子
同	山彦綾子	同	山彦さち子
同	山彦祥子	同	山彦千子

五、新内梅雨衣醉月情話 (花井お梅)

浄瑠璃	新内勝英太夫
三味線	新内勝史郎
上調子	新内仲一郎

六、清元梅柳中宵月 (十六夜)

浄瑠璃	清元志佐太夫	三味線	清元美治郎
同	清元美寿太夫	同	清元美多郎
同	清元志寿子太夫	上調子	清元志寿造

七、常磐津 乗合船恵方万歳

浄瑠璃	常磐津清勢太夫	三味線	常磐津文字兵衛
同	常磐津津太夫	同	常磐津八百八
同	常磐津清若太夫	上調子	常磐津絃寿郎

曲目解説(演奏順)

(解説 竹内道敬)

第一部

清元津山の月

本山荻舟作詞、三世清元梅吉作曲、大正十三年四月、岡山市で開かれた博覧会の余興として演芸場で初演。七世坂東三津五郎の振付で、土地の芸者が踊ったという。

作詞の本山荻舟が岡山出身というので、五段返し所作事「吉備栄三国絵巻」を書いたが、その四段目。はじめは「鶴山の月」の題だったらしい。このほかは長唄、常磐津曲だったが、今はすべて廃曲。このように地方で初演された曲が、

後世まで残ったのは珍らしい。

津山藩に仕官している名古屋山三を慕って、京都からはるばる出雲のお国が尋ねて来て、月の美しい津山の山道で出逢う。そこで二人は手をとって喜びあい、昔を思い出しながら、かぶき踊りや槍踊りを踊るという場面。夢のように美しい情景で、山三はもしかしたらお国の見た幻かも知れない。

一中節 松羽衣

一中節は、古く元禄のころ(一七〇〇年ごろ)に京都ではじまった浄瑠璃で、はじめのうちは歌舞伎の舞台で演奏されたが、やがて劇場とは縁がなくなり、江戸に移されて現在まで傳承されてきた。

「松羽衣」は、謡曲「羽衣」から脚色されたもので、正確な初演年代は未詳。たぶん文化年中(一八〇〇年ごろ)の作品。三保の松原で、漁師伯竜が天人の羽衣をみつけ、持って帰ろうとするが、天人の嘆くのをみてこれを返す。天人はその札に舞を舞って天に帰る。よく知られているお話だが、一中節らしい特徴がよくあらわれている。

義太夫 天網島時雨炬燵 — 紙治内の段 —

原作は近松門左衛門作の「心中天網島」で、享保五年（一七二〇）大阪竹本座で初演された。その後、何度か改作されて上演されたのを集大成したのがこの「天網島時雨炬燵」で、歌舞伎でも義太夫でもくり返し上演されている。

大阪天満お前町の紙屋治兵衛は、女房も子もありながら、曾根崎新地の紀の国屋小春と二年越しになじみ、親方から仲をせかれて心中の約束をする。治兵衛の兄が侍姿になって小春に逢い、心底をきくと、治兵衛と一緒に死ぬ気はないという、これを立ち聞いた治兵衛は、怒って小春を刺そうとするが、兄にいさめられて小春と縁を切って帰る。

ここから今日演奏される場面になる。それから十日ほどたった日のこと、治兵衛は恋がたきの太兵衛が小春を身請けするとき、面目がないと嘆いている。それをきいた治兵衛の女房おさんがびっくりし、小春に治兵衛と別れてくれと頼んだことをうちあける。そして小春は太兵衛と添う気はあるまい、きつと死ぬにちがいないと心配する。そして身請けの金を作ろうと、衣類を質入れしようとするところまで。

このあと、おさんは実家の父に連れ帰され、治兵衛と小春と網島の大長寺で心中する。妻子ある男と遊女の心中だが、この場面は治兵衛とおさんがよく描かれており、人情味あふれる作品となっている。

箏曲冬の曲

吉沢検校作曲の古今組の一つ。手事と替手は、松阪春栄が明治二十八年頃に補作したもの。

内容は『古今和歌集』冬の部から、和歌四首をとって組歌形式にしたもので、第一歌は読人知らず、第二歌は紀秋岑、第三歌は壬生忠岑、第四歌は春道列樹の作。手事は、マクラ―手事一段―二段、という形。なお、三、四歌の歌意から、追善曲として用いられることもある。

新内若木 仇名草

新内といえば「蘭蝶」といわれるほど、この曲はまず第一にあげられる流行曲であり、代表作である。全曲を演奏するには一時間半以上もかかる大曲であるが、その最大の魅力は、前半にある二つのクドキが、いかにも新内らしい特色を十分に発揮しているからである。それはもちろん、ひとつは此系のクドキ「四谷で初めて逢うた時……」であり、もうひとつはお宮のクドキ「縁でこそあれ末かけて……」である。これが多くの人の耳になじんでいることは、今さらいうまでもないだろう。

市川屋蘭蝶という浮世声色身振り師は、榊屋の此系となじみを重ね、女房お宮

が身を売った金まで入れ揚げてしまう。お宮は客となって此糸に逢い、蘭蝶との夫婦の成り立ちを語り、蘭蝶と縁を切るように頼む。此糸はお宮の情ある話に、縁を切ることを約束する。その様子を隣座敷できいていた蘭蝶は、此糸の本心は死ぬ覚悟であろうと察し、結局、お宮の願いも空しく、二人は心中してしまふ。一言でいえば単なる三角関係だが、この三人は今やどうしようもないところに追い詰められている。此糸はほかに行くところもないので、蘭蝶と逢っているときだけが幸せなのだ、これもまことに不安定な状態である。はじめて逢ったときの方が、思い出されるばかり。というので「四谷で初めて……」になる。初代鶴賀若狭掾が安永（一七七二―八一）の末頃作つたものと思われる。なお、浄瑠璃で吉原の「アリンス言葉」を使用しているのは、この曲が最初らしい。

常磐津 仮名手本忠臣蔵 — 大序鶴ヶ岡の段 —

「忠臣蔵」については、とくにあらためて記すこともあるまい。日本の代表的な舞台作品で、上演回数もつとも多く、誰にも親しまれている。

そのもとは義太夫で、竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作で、寛延元年（一七四八）八月、大阪竹本座で初演され、その後まもなく歌舞伎に移されて独特の発達をとげた。

今日演奏される「大序、鶴ヶ岡の段」は、その発端にあたる部分で、大切な場

面。これは明治初年、常磐津小文字太夫が義太夫から常磐津に直したものと伝えられている。

鶴ヶ岡八幡宮の造営が成つたので、足利左兵衛督直義は將軍尊氏の代参として東下し、新田義貞が討死のとき着用していた兜を宝蔵に納めることになる。その鑑定人としてかつて義貞に仕えていた塩谷判官高定の妻顔世御前を召し出だす。顔世御前は、数ある兜の中から蘭奢待の名香をたきしめた竜頭の五枚兜をえらび出し、直義は塩谷、桃井とこれを納めに立つ。残つた高の師直は顔世を呼びとめ、歌の添削に託して艶書をわたして迫る。

そこへ桃井若狭之助が来合せ、顔世を助ける。師直が怒って悪口をいうので、若狭之助が憤慨するところまで。

長唄 鞆 猿

明治二年、二世杵屋勝三郎作曲。原拠は狂言の「うつば猿」。歌舞伎の舞台上で上演されるのは常磐津の「花舞台霞の猿曳」で、こちらももとは同じ。しかし常磐津のほうは歌舞伎らしく女大名と奴になつていて、華やかに話しが展開する。それに対してこちらの長唄は、同じ狂言種ながら、そういう派手さはなく、狂言に近い構成で、かえって上品さを出している。

大名が春野の狩りの帰りに、子猿を連れだした猿曳に出あふ。大名はその子猿を矢入れの鞆にと所望する。猿曳きの愁嘆があり、やむなくただ一撃にと鞆を振り上げるが、子猿は殺

されるとも知らず船を漕ぐ真似をする。それを見て大名も哀れに思い、子猿の命を助ける。猿曳きはお札に猿を舞わせるという筋。

なおこの曲は、二世杵屋屋勝三郎がかねて最真になつていた、浅草蔵前の酒問屋の主人に頼まれて作ったものといわれている。

第二部

箏曲富士山

昭和三十五年十一月十二日、第十五回芸術祭参加、第五回上原真佐喜箏曲公演会で初演され、奨励賞を受賞した作品。詩は草野心平の詩集『富士山』から取つたもので、九行目の「昔からの樂器のすべては鳴りだすのだ」のあとに比較的長い合の手があり、また、終りの「ああ 夢見るわたくしの富士の祭典」のあとにも長い合の手があるが、ここでは笙が合奏されて雰囲気をもりあげる。

義太夫生写朝顔話（宿屋の段）

天保三年（一八三二）正月初演。ふつう義太夫節が初演され、あとで歌舞伎化されるといふのが多いが、これはまず歌舞伎脚本が出来、それが小説として出版され、評判になつて歌舞伎になり、そのあとで義太夫節に作られた。

深雪は宇治の虫狩りで宮城阿曾次郎と恋しあつたが、阿曾次郎が鎌倉出張を命じられたので、しばらく別れる。のち深雪には大内家の駒沢次郎左衛門との縁談が起ころが、実はそれが阿曾次郎とは知らず、家出する。やがて深雪は両眼を泣きつぶし、阿曾次郎に習つた朝顔の唄を唄いながら、浜松のあたりをさまよい歩いている。そしてここ島田の宿で、はからずも二人はめぐりあふ。

長唄旅

田中青滋作詞、三世今藤長十郎作曲。昭和三十六年一月二十八日から同三十日まで、新橋演舞場で開かれた第十六回鯉風会で初演され、西川鯉三郎が踊つて好評を博した。

東海道五十三次は、百二十五里二十町ある。それを軽く楽しい旅にまとめたもので、よく知られた民謡などを加えて変化をつけている。調子変りがはげしく、さらに京都へ着いてからも余裕があるのが特色。

河東節 常陸帶花棚

河東節は、享保二年（一七一七）に江戸ではじまった浄瑠璃で、はじめのうちには歌舞伎の舞台でよく演奏されたが、現在では歌舞伎十八番の「助六」だけに出演するようになった。

「常陸帯」は、天明のころ（一七八一―八八）に作られた曲であるが、一説には寛政三年（一七九一）の作で、溝口侯の作詞ともいう。内容は謡曲「桜川」によったものだが、前半は失われた。ここ桜川に、わが子を尋ねて花に狂う女性がいる。面白く花をすくえばその子の行方を教えるといわれて、花に狂うところからやがてそれを見ていた群衆の中から、お坊さんが出て、連れていた子供と再会することができるところまで。

新内梅雨衣酔月情話（大川端）

明治二十一年三月、五世富士松加賀太夫作曲。

明治二十年六月九日の夜、日本橋浜町二丁目の横丁で、近くの待合酔月楼の女将花井お梅が、番頭峰吉こと八杉峰三郎を、怨恨のため板場用の小出刃で刺し殺した。その夜のうちにお梅は自首、翌年三月に無期徒刑の判決がきまって収監された。

この事件は当時大評判となり、東京絵入新聞は「花井於梅酔月奇聞」という続

うへちらちら小提灯など、原文のままのところはずいぶんある。

「へうきふし繁き……」のお梅のクドキがいいところで、へ向うへちらちら小提灯からほろ酔いの峰吉のせりふに、新内流しの手があしらいになり、雰囲気をかもし出す。上調子が高音をきかせるのも一つの特色。殺しの場面へと盛り上げる作曲の巧みさはさすがである

なお、時間の都合で、前半とお梅のクドキのあとを省略いたします。

清元梅柳中宵月（十六夜）

安政六年（一八五六）二月江戸市村座で初演された。河竹黙阿弥四十四歳の時の作品で、十六夜清心を主題とした「小袖曾我薊色縫」の四立目、十六夜清心出逢いの場に使われた浄瑠璃。配役は岩井衆三郎のちの半四郎（十六夜）市川小団次（清心）で、清元は延寿太夫、家内太夫、美佐太夫、徳兵衛、梅次郎らであった。

鎌倉極楽寺の所化清心は、大磯の遊女十六夜のもとへ通い、女犯の罪を犯した科により追放の身となる。それと知った十六夜は廓を抜け出して来て清心に逢い、どうにもならなくなった二人は、ともに心中しようとする場面。

「朧夜に憎きものは男女の影法師」という角書にあるように、幕末の江戸の類

き物を連載した。その記事の一節をアレンジして新内化したのがこの曲で、へ向
靡気分をうつし出した歌詞と曲節は、情愛と色気がこぼれんばかりの名作として、
よく演奏される。

常磐津 乗合船恵方萬歳（乗合船）

初春の隅田川の渡し場に、いろいろな人が落ち合って、芸尽くしをするとい
趣向。登場人物が七福神に見立てられているのも特色のひとつ。賑やかな置き
あと、万歳と才蔵が出て、通人、大工、芸者などが続き、白酒売りのいい立て、
大工の道具尽くし、通人の愉快な話、万歳と才蔵の柱建てなど、江戸末期の風俗
描写が展開される。

三世桜田治助作詞、五世岸沢式佐作曲で、天保十四年（一八四三）正月、江戸
市村座の春狂言に初演。初演のときは「魁香いせ物語」という題で、常磐津、富
本、竹本、長唄の地だったが、慶応ごろに常磐津に編曲され、題名も今日の「乗
合船」に改められた。それが明治二十九年正月に東京春木座で、市川猿之助、中
村勘五郎らが復活上演してから、大流行するようになった。今日は時間の都合で
一部を省略して演奏される。

御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそおでかけ下さりまして、ありがとうございます。
ございました。何かと不行き届きの点もございましたが、
お許しを願ひまして、どうかごゆっくりとお楽しみ下さ
いますよう、お願いを申し上げます。

今までには、このようにしてまとめて御観賞してい
だく機会は、少なかったように思います。その少ない機
会を大切にしようと、出演者も一生懸命でございます。
これからも、どうか続けて邦楽に変わらぬ御支援をいた
だけますように、お願い申し上げます。

来年は、都合により会場が変更になります。新宿の朝
日生命ホールで、三月三日(土)に開催する予定でございま
す。番組がきまり次第、御案内をお送りいたしますので、
はさみこみのアンケート用紙に、おところ、おなまえを
お書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い
申し上げます。また、今日おきき下さいました御感想や
御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のため
に御指導を賜りますよう、合せてお願い申し上げます。